

右件歌者、高橋連蟲麻呂歌集中出、

〔古今和歌集東二十〕常陸

筑波根のこのもかのものに蔭はあれど君がみかけに増す蔭はなし
筑波根の嶺の紅葉おち積りしるもしらぬもなべて悲しも

〔新古今和歌集十一〕

筑波山はやましげ山しげ、れど思ひいるには障らざりけり

〔新勅撰和歌集十九〕

ひたちにまかりてよみ侍ける

よそにのみ思ひをこせしつくばねの峯のしら雪けふみつるかな

〔臥雲日伴錄〕文安六年○寶元年七月四日、命城呂話平家者三句最初話後白河法皇御宇之德曰、仁流於秋津洲外、慶繁於筑波山陰云々、予問、筑波山在何處、呂曰、在常陸州、蓋俗傳、自天竺飛來、故山中多異草珍木云々、平家語取子樹陰最繁以爲喻耳、

〔廻國雜記〕翌日○天明十八年九月二十四日、筑波山に參詣し侍りけるに、初雪ふりて紅葉ばうす紅に見えければ、

何れをか深し淺しとながめましもみぢの山のけさの初雪、神前にて詠じ奉りける、
さはりなくけふこそこ、につくばねや神の恵のは山繁山、誠にこのもかのもと詠せしもこ
とはりにて、山々の紅葉たとへん方もなく侍り、道すがらくちすさびける歌、

筑波山此面彼面のもみぢ葉に時雨も繁き程ぞしらるゝ、みな川は、此山の陰に流れ侍り、戀
ぞつもりてと詠せし歌を思ひいで、

筑波ねのもみぢうつろふみなの川淵より深き秋の色かな

〔伊呂波字類抄比叡山〕

諸寺比叡山